

窓

1992 SPRING

11

特集

検閲

その知識人

検証 日本 の 知識 人

市民に生きる = 久野 敏
 ■ 事実 に 生きる = 本 多 勝一
 ■ 運動 に 生きる = 安 東 仁 兵 衛
 ■ 志 に 生きる = 西 谷 能 雄
 ■ 異 端 に 生きる = 石 堂 清 倫

*

三人称としての社会科学
 ■ 学 = 竹内真澄 ■ 市民社
 ■ 会論・序説 = 稲葉 操 一
 ■ 郎 ■ 日 本 的 勞 働 過 程
 ■ の フ レ ッ ク シ ョ ン ル ・ シ ャ
 ■ ス と は 何 か = 京 谷 栄 二
 ■ 個 人 主 義 化 と 「 社 会
 ■ 的 な も の 」 の 解 体 = 杉
 ■ 山 光 信 ■ 近 代 の 型 と 日
 ■ 本 と い う 謎 = ジ ・ ア
 ■ ナ ソ ン ■ ペ ト ナ ム は ど
 ■ こ へ 行 く の か = 石 川 次
 ■ 郎 ■ コ ロ ソ ナ ス と 先 住
 ■ 民 = 関 暁 野

窓社
MAO SHA

定価1700円(本体1650円)

ISBN4-943983-54-5 C3030 P1700E

特集 検証：日本の知識人

終始、市民に生きる

●いま、知識人になにが問われているか
驕りにほくそ愛むじやなし、
なぜ罪りが犯されたかを問へよ。

久野 収 8

事実に生きる

●競争を回避する知識人
知識人の欠かせぬ条件とは歴史を
のほかに求めたと思ふ。

本多勝一 33

運動に生きる

●左翼運動と知識人
人間は特殊な状況下では歴史にな
りうる、とりわけ政治の世界では。

安東仁兵衛 53

志に生きる

●著者としての知識人の期待
いい本が売れている時には、その
受け手の読者もまた知識人だ。

西谷能雄 67

異端に生きる

●政治のなかの知識人
アルタの自由思想家には新しい
発見の可能性がある。

石堂清倫 79

哲学者

記者

編纂者

出版人

編集者

新・社会科学概論のために

三人称としての社会科学

●(コ)ミエケイ・ヨシの生産力に立脚した新しい言語の形成へ向けて

竹内真澄 198

自己批判としての社会科学(下)

●関係性の危機を克服するために

清 眞人 188

個人主義化と「社会的なもの」の解体(下)

●進歩の逆説

杉山光信 146

近代の型と日本という謎(II)

●日本のナショナルリズムと近代概念

ニアナシ
中西新太郎訳 157

市民社会論・序説

●国家と個人の間での市民社会の限界と可能性

稲葉振一郎 124

日本の労働過程のフランクフル・システムとは何か

●「日本的経営は世界に何をもちたらずか」国際論争への介入

京谷栄三 104

投稿

文

シリーズ

窓

11

目次 1992 Spring

●左翼運動と知識人

出版人

志に生きる

●著者としての知識人への期待

翻訳家

異端に生きる

●政治のなかの知識人

人間は特殊な状況下では悪魔にな
りうる。とりわけ政治の世界では。

安東仁兵衛 53

い本が光れている時には、その
受け手の読者もまた知識人だ。

西谷能雄 67

ブルジョア的自由な研究には新しい
発見の可能性がある。

石堂清倫 79

新・社会科学概論のために

三人称としての社会科学

●「コミュニケーション」の生産力に立脚した新しい言語の形成へ向けて

竹内真澄 198

自己批判としての社会科学(下)

●関係性の危機を克服するために

清 真人 188

個人主義化と「社会的なもの」の解体(下)

●進歩の逆説

杉山光信 146

近代の型と日本という謎(II)

●日本のナショナリズムと近代概念

J・アインソン
中西新太郎訳 157

市民社会論・序説

●国家と個人の間での市民社会の限界と可能性

種葉振一郎 124

日本の労働過程のフレキシブル・システムとは何か

●日本の経営は世界に何をもちたらずか「国際競争への介入

京谷栄二 194

ベトナムはどこへ行くのか

●サイゴンとハノイの旅から

石川次郎 4

民族的排外主義に苦慮するハンガリー

●現実の共生を破壊するもの

南塚信吾 140

知識人としてのグラムシの実像

●経済学誕生 飯田繁夫著 「環境倫理のすすめ」加藤尚武著
「島田三郎と近代日本」井上徹著 「昭和天皇の十五年戦争」磯原彰
「家思想」加藤尚武著 「メディアに描かれる女性像」メディアの中の性別を考へる公編
「区際戦争と企業化」川上武・小坂実著 「社会主義と現代世界」平子友長著
「市民運動の宿題」吉川勇一著 「これほどにめざす」丸山健著

編集部 117

加藤哲郎 102

窓

11

片桐 著
「グラムシ」

—リロポト・三六〇五

知識人としての グラムシの実像

加藤哲郎

Reizō Katō

グラムシの評伝を読むのは、フイオリ

「グラムシの生涯」(平月社、一九七三年)以来だ。全二四五〇頁以上の大作である。桜井哲夫「メシアニズムの終焉」社

会主義とは何であったのか(筑摩書房)後閑雄「大転換—イタリヤ共産党から左

翼民主党へ」(惑社)と一緒に読んだ。ロシア革命以後の社会主義・共産主義思

想の流れの中で、グラムシは、トロツキ、アハリン、ローサ・ルクセンブルク、ル

カーチ、コルシコらとならぶスターリン主

義とは異なるマルクス主義理論家、イタリ

アの歴史と文化に根ざしたマルクス主義の

開拓者、ソ連型社会主義と早くから決別し

たイタリヤ共産党の創設者として扱われて

きた。しかし、グラムシ生誕百年の一九九

一年が、一九一七年のロシア革命に始まる

伝統の終焉だった。グラムシが葬子を獲し

たソ連邦は解体した。グラムシの創設した

イタリヤ共産党は左翼民主党へと転身した。

レーニンとロシア革命はもろんのこと、

マルクス主義と社会主義運動の縁が問わ

れている。グラムシにおいては、何が死に

絶えつつあり、何が生き残るのか、こう

した問いが浮かんできてくるをえない。

その点で、と獲得的に語られている。世界史の転換のなかで、グラムシ自身の「知識人」としてのあり方が、問われていく。つまり、レーニン主義の系譜で「現代の君主共産党」に最後までメシアニズムと「オールド主義」的分析・発想でオックスの転換への必要性を喚び上げたかもしれぬグラムシとの、二重性において。片桐薫「グラムシ」は、グラムシに内在するこの矛盾を、ある程度は析出している。グラムシ礼賛の昔ではない。膨大な手紙やフイオリ以後に収集された近親者・友人たちの回想を効果的に用いたから、ソ連共産党内争への態度や、妻ショリアとの離婚まで決意した真藤や、獄中で不安定な精神状態の描写のなかに、「人間グラムシ」の苦悩を浮き彫りにしている。それは、偶像化されたグラムシを壊すものではあるが、逆にある種の救いを与える。家政婦に私生活を生ませたマルクスのエピソードが、「人間マルクス」としてレーニン主義的「完全主義」(ハベル)明瞭のなかでの消滅になるように。リヨニ党大会で七時間にわたってグラム

後閑雄「大転換」を認んでも、イタリヤ

共産党の左翼民主党への脱皮過程でグラム

シが争点になった形跡はない。ショヴァン

ニの「むかし、むかし、トリアツチイがい

て、現実の共産主義があった」という論文

が示唆するように、グラムシは過去のひと

とされている。オક્ットの転換方針にたいし、

グラムシ研究所の内部は、所長グマツカ、

副所長フンチーナらは構成、会長タロー

ニや「獄中ノート」解説責任者シュエラター

ナらが反対と、分岐したようだ。

桜井哲夫「メシアニズムの終焉」は、刺

戟的な知識人論だ。サン・シモン主義には

含まれていない「知の位階制」の問題が、ロ

シア・インテリゲンツィアのジャコボン主

義とカヴツキを経由して、レーニンのメ

シアニズムの前衛実験に结晶し、ルカーチ

ヤサトルルにまで及んだ。グラムシは「伝

統的知識人」とともに「有機的知識人」の

概念を提唱し、ベルンシュタインやソレル、

ウェーバーとともに二〇世紀的な「専門家

による合理的な世界設計」の問題に気づいて

それは「現代の君主」に未来を託したグラムシとアメリカニズムの到来を予見したグラムシ、あるいは、後閑雄氏が「統治能力や政權獲得を重視する勢力」と「社会的対抗勢力の強化を重視する勢力」と類型化したイタリヤ共産党と左翼民主党内の矛盾の、グラムシ自身の内部での葛藤を、端的に象徴するものであると思われた。本書は、グラムシとイタリヤ共産党に關するさまざまな新しいエピソードを散りばめている。ただ、伝記であるためか、個々の史実の典拠が注記されなかつたのは残念だ。「人間グラムシ」を、レーニン・コミンテルン型共産党の系譜の革命家として読むか、ヘゲモニー論やフキート主義論の今むか、ヘゲモニー論とフキート主義論の今日も示唆的な社会科学の理論家として読むかは、読者の判断に任されている。グラムシの「実践の哲学」が唯物論か観念論かなどという不毛な論争さえ行なわれてきた日本の知的風土のもとでは、本書のように、等身大のグラムシ像を示す書物の存在意義は大きい。なお、本書の姉妹編として、同じ著者がグラムシの思想・理論を論じた「グラムシの世界」(勁草書房)が刊行されている。

窓

1992 SUMMER

12

特集

揺れる日本

の会社

法人資本主義の原理と
 その解体＝奥村宏 ■ 社会学
 社主義の危機の現象
 田畑稔 ■ 日本型企業
 組織のなかの労働者＝
 小磯彰夫 ■ ニつの沢
 キシビリナイ＝熊沢誠
 ■ 男女別労働管理の構
 造＝服部良子 ■ 転機に
 立つ会社本位主義＝奥
 村宏 × 岩井克人

*

経済学に生きる＝池上
 惇 ■ 過労死と社会学
 川人博 ■ 労働者協同
 組合の挑戦＝石塚秀雄
 ■ 農民の野望＝生
 野 ■ 文化として
 赤井正二
 ソ連科学アカデミーの
 危機＝伊東幸之

窓社

MAO

SHA

定価1700円(本体1650円)

ISBN4-943983-57-X C3030 P17005

検証：日本の知識人・インテリゲンチヤ

経営者にならぬ。生活知識人を育てるために

池上 惇 132

特集 揺れる日本の会社

理論 法人資本主義の原理とその解体 28
 ◎会社本位主義の成立と変化の条件
 法人資本主義は会社の「会社による
 会社のための管理の体系である。

自立 「会社主義」の危機の現象学 43
 ◎会社にとって人間とは何か、人間にとって会社とは何か
 必ず内なる「会社主義の自己点
 検、自己批判こそが必要である。

実態 日本型企業組織のなかの労働者 60
 ◎富士銀行員から見た会社と個人
 忘れられた「上」の声をあげ
 られるヤクが到来している。

管理 二つのフレキシビリティ 73
 ◎日本の経営へのアプローチ
 近世資本主義はもはや、労働現場のナラ
 シシムな小企業とはいえない。

性差 男女別労務管理の構造 89
 ◎日本の会社にとっての家族と女性
 女性には「家庭責任」という踏み絵をか
 きつけて振り分けられている。

対論 転機に立つ会社本位主義 100
 ◎法人資本主義はどこへ向かうか
 法人資本主義の運命、選挙の自
 由の拡大、大企業分割解体だ。

コメント ●盛田昭夫「日本型経営が危い」を読む 56
 課題をどう達成するか◎大企業中心こそが問題
 なにが問題とされるべきか◎他人事意識で読んでほならない

論文 労働者協同組合企業への挑戦 122
 ◎オルタナティブとしてのモッドコン

講演 「日本型資本主義」の選択 166
 ◎歴史意識のゆらぎのなかで

資料 はじめに 危機の背景 八月事件とアカデミー アカデミー改革案 196
 連邦アカデミーからロシア・アカデミーへ 崩壊に瀕したアカデミーの財政
 市場経済化の波に洗われるアカデミー 縮びに代えて

目次 過渡期と社会科学 9
 ◎過渡期をどう乗り越えるか

講演 加茂利男 166

資料 伊東孝之 196

対応

管理

構造

論文

講演

資料

コラム

ポスター

インタビュー

シリーズ

「ニッポン」の再考(三) 企業と個人

富士銀行員から見た会社と個人

とれるヤツが創業している

小坂 亨 6

非正社員はもはや、労働現場のボラ

リジナルな小企業とはいえない。

熊沢 誠 73

日本の経営へのアプローチ

男女別労務管理の構造

日本の会社としての家族と女性

奥村 宏 89

法人資本主義の再考 選択の自由

由の班次が、大企業を分断させた。

岩井 克人 100

転機に立つ会社本位主義

法人資本主義はどこへ向かうか

岩井 克人 100

盛田昭夫「日本型経営」が危い」を読む

課題をどう達成するか。大企業中心こそが問題

林 正樹 96

なにか問題とされるべきか。他人意識で眠ってはならない

大江 秀典 58

労働者協同組合企業業の挑戦

オルタナティブとしてのモビリティ

石塚 秀雄 122

「過去と社会科学」

過去と社会科学をめぐって

川人 博 9

はじめに 危機の背負 八月事件とアカデミーアカデミー改革案

連邦アカデミーからロシア・アカデミーへ 崩壊に瀕したアカデミーの財政

市場経済化の波に洗われるアカデミー 結びに代えて

伊東 孝之 196

「日本型資本主義」の選択 歴史意識のゆらぎのなかで

加茂 利男 166

農民なるもの終焉。都市の觀念の空容

関 曠野 2

ハンガリー・地方自治の展開 機軸のかり方にみる「革命」の進化

南塚 信吾 4

境界線上の思想「人類の孤独」について ハイ・ミューズ / 照井日出彦

「豊かな国」をいふ 本山英彦 明治維新と天皇制 田中彰著 部落解放運動の七〇年 島原鉄男著

「共同研究」冷戦以後 中宮根康弘・佐藤盛三郎・村上操著 西田照彦著

「王の三つの身体」E.H. カントロヴィチ著 / 小林公敏 「戦国大名と天皇」今谷明著

「日本憲法体制」室山肇正著 「自然性のゆくえ」川窪田八潮著

新・社会科学概論のために

生きられる文化としての社会科学

● 読者の方と行方難しの皆さまへ

赤井 正二 180

憲法

1992 AUTUMN

特集 日本国憲法の深層

憲法の深層

憲法原理の再構成 = 高橋彦博 ■ 「脱欧」、そしてカッコつき「入盟」？ = 樋口陽一 ■ 聖典としての日本国憲法 = 長尾龍一 ■ アメリカから見た日本国憲法の独自性と憲法 ■ 地域の問題点 = 新崎盛暉 ■ 平和憲法・PKO・アジア = 鄭成培 ■ 平和憲法のゆくえとアジア

佐久間 全 詞 鄭 新崎 盛暉
 高野 敬 介 藤 成 培 暉
 信 收 得 介 藤 成 培 暉

憲法「改正」が日程に上りはじめた今、あらためて憲法を深層から論議する。

憲社

第12号 特集 揺れる日本の会社
 奥村 宏 / 岩川 晃久 / 熊取 誠 / 服部 良子 / 田畑 稔 / 小磯 彰夫

KAROSHU 11 過労死弁護団全国連絡会誌編

日本語版 定価1200円(税別)
 英語版 定価1545円(税別)
 国際版 定価2580円(税別)

少年事件——21世紀の子どもたちの権利を自立のために
 全司法労働組合編 定価2000円(税別)

ISBN4-943-983-62-6 C3030 P1700E

憲社 WADO

定価1700円(税別)

論争

新ロッキン革命は、脱社会主義か

●藤井一行、土橋武彦(責任者)

藤井一行 4

理想

憲法原理の再構成

●新たな法規範としての可能性

憲法体制の形骸化は、ほかならぬ新の側からも進行させられてきた。

高橋彦博 25

一省察

「脱欧」そしてカツコミ「入亜」?

●「日本モデル」と立憲主義

日本が自分の手で選んだ代償物、即ち憲法は、助中すべきでない。

樋口陽一 44

追産

聖典としての日本国憲法

●罪からの救済を示す信仰箇条

戦後憲法は「ツカサ」相の御感荷、聖賢解者カニストだ。

長尾龍一 51

対談

日本国憲法の可能性

●武器としての憲法の磨き直し

日本の法制は大連令から今日の憲法にいたるまで全部外圧なことで、

久野信 61

批判

アメリカから見た日本国憲法

●社会性の比喩としての移民と憲法

憲法九条は、自国対他国の二分法による均等な関係設定を不可能にする。

酒井直樹 103

多権

地域の独自性と憲法の問題点

●沖縄から見た日本国憲法

復帰の現実には、島の要求が、独自の個性にむけていられる。

新崎盛暉 75

記壇

平和憲法・PKO・アジア

●韓国から見た日本国憲法

平和憲法も、自衛隊もては、どこかを選択する時がきている。

鄭成培 84

再生

平和憲法のゆくえとアジアの期待

●台湾から見た日本国憲法

日本では「軍拡」を「平和」の真敵だと物議を醸している。

許介麟 89

内容

在日韓国・朝鮮人の人権と日本国憲法

●憲法が内在的に要請するもの

憲法の変化が、あつて平和的国際法がアジアから預かる。

金敬得 96

特別論文

統一ドイツの安全保障政策と憲法問題

●冷戦終結と軍事力のゆくえ

栗原優 196

研究ノート

岐路に立つドイツ社会

●旧東独地域の周辺化と労働運動の困難

真田哲也 132

批判

現代日本の「社会」と「国家」

●分析の課題と視角をめぐって

昼神洋史 161

フールド
ホフマン

カナダ・ライカルの政治戦略

●政党から独立した活発な活動

海野八尋 156

シリス

MEGA「マルクス・エンゲルス全集」はいまどうなっているか

検証：日本の知識人・インテリゲンチヤ

M・フント 154

古田光 116

哲学に生きる

●「マルクス主義」の歴史と現在

密

13

多 知
記 憶
得 生
刊
編 集
研 究
稿
フ
ル
ド
ホ
キ
シ
ス
シ
ス
シ
ス

●罪からの救済を示す信仰箇条
●武器としての憲法の磨き直し

●社会性の比喩としての移民と憲法
●憲法九条は自國體の二分法による均質な國體建設を可能にする

●沖繩から見た日本國憲法
●韓国から見た日本國憲法
●台湾から見た日本國憲法

●日韓・朝鮮人の人権と日本國憲法
●憲法が内面的に要請するもの
●冷戦終結と軍事力のゆくえ

●旧東独地域の周辺化と労働運動の困難
●分析の課題と視角をめぐって

●政党から独立した活発な活動

●現実の不安定な関係と「国家」

●「経済危機」脱批判

●「シニア」の政治戦略

●「美意識としての社会科学」

●日本の法制は大憲法から今日の憲法にいたるまで変遷が著しく、佐高信收

●長尾龍一

●地域の独自性と憲法の問題点

●平和憲法・PKO・アジア

●統一ドイツの安全保障政策と憲法問題

●岐路に立つドイツ社会

●現代日本の「社会」と「国家」

●カナダ・ライカルの政治戦略

●MEGA「ブルクス・エンゲルス全集」はいまどうなっているか

●哲学に生きる●現実との緊張関係をめぐるイデオロギ

●生産力概念とのかかわりをめぐって

●長尾龍一

●久野信收

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

●編集部

●酒井直樹

●佐高信收

●長尾龍一

●新崎盛暉

●成培

●許介鱗

●金敬得

●栗原優

●真田哲也

●昼神洋史

●海野八尋

●M・フント

●古田光

●関野曠

●重田澄男

●照井日出喜

●吉田正岳

窓 14

1992 WINTER

特集

理想主義は復権しようか

理想主義は復権しようか

地球時代のユートピア
 = 井上ひさし ■ 精神の
 間をいかに克服するか
 = 加々美光行 ■ 世紀末
 の理想主義 = 葵尚中 ■
 「翻身」の思想 = 坂本
 進一郎 ■ 苦界浄 ■ 土の恩
 恵 = 原田正純 ■ 共生と
 循環の農業 = 植田劭思
 ■ 技術と技術者の変革思
 想 = 畔上純雄 ■ 参加型
 市民社会へのプロブレマ
 ッティクス = 機田克巳 ■ 「理想
 国家」主義から「理想
 社会」主義へ = 新島淳
 良 ■ エコロジカル・ウ
 イツの实践 = 丸山茂樹
 ■ 理想に生きる = 北御
 門二郎

*

現代医療の課題と社会
科学 = 増子忠道

窓社
 MAIDO SHIN
 定価1700円(本体1650円)

ISBN4-943983-63-4 C3030 P1700E

●自然法にもとづく新しい政治システムの構想
●空く憲法を改定した

14 関 野 明

●変わる主体的政治参加の形式
政党政治の構築して、日本社会の政治的人関係の質的転換が進む

30 高橋 彦博

●市民は憲法的には職員を感ずる
固有の権利を行使する主体である

45 古川 純

●国民主権から考える
「国対政治」に見る政党政治

64 五十嵐 仁

●「国会議員」における政党への矛盾意識
●「二年生議員」創設のアンケート

55 編集部

●保守であれ、革新であれ、長期政権
は(意)の波に流れてつぎ

79 藤本 一美

●「政権交代のある民主主義」への展望
●イタリアの政界再編と日本の政界再編

94 後 房 雄

●統一ドイツにおける政党政治のゆらぎ
●なせ政党システムは危機に陥ったのか

139 真柄 秀子

●藤井一行教授に答える
＜新ロシア革命＞は社会主義指向か

182 上 島 武

●「仮想の近代、村松道平」著
「生物字が運命を決めたとき、レナード・アライチンブルク」著
「フナ・クロスマン／アライオン・カンラック」著
「バス軍靴の時代」正木剛彦著
「資料 日本ウイメン・リウ史」清田明代／佐伯清子／木下子編
「高等学校の社会史」岡協司
／飯田浩之編
「欲望の街、ヒュー・アロノナキ」著
「キリストアックの現代の人権」川博紀著
「昭和史のなかの社会政策、佐野俊吾」著
「民主的社会主义と社会民主主義」ホルスト・ハイム著
「グイルト・スロン・ユン・チン」著

H.O.L.I.S.A.I
190 庄曾 水野 邦彦

154 編集部

162 吉田 康彦

窓 15

目次 1998 Spring

9.4.6.4.0.8.8.8.8

95.6.51/20/21

季刊

本文カット・ПАРИСКА R. МОСОВА